

# 崩れ落ちる鐘 "The Bell-Tower" 論

相原成史

---

## ●要約

本論では1955年に発表されたハーマン・メルヴィルの "The Bell-Tower" に見られる機械文明批判を読み解く。

作品の主人公バンナドナは国家の命を受けて、イタリア随一の鐘塔建設を行う。彼は優れた技術者であるだけでなく、稀有の芸術家でもあったが、国家の援助と民衆の後押しのもと次第に傲慢になり、ついには職人の一人を塔建造の障害になるとし殺害してしまう。国家は塔建造を進めるためそのことを不問とするが、最終的にバンナドナは自分が作った自動鐘撞き人形に頭を打たれ死んでしまう。そしてその後、塔自体も鐘の重みに耐え切れず崩壊する。

多くの批評家はこの作品をホーソー風のアレゴリーと解釈し、人間の傲慢に対するメルヴィルの警鐘と捉えるが、この作品の意義はそれだけにとどまらない。機械文明の発達に伴い、19世紀のアメリカは「マニフェスト・デスティニー」の旗印のもと国土拡張を進め、帝国主義化していくが、メルヴィルはこの作品において、その帝国主義を批判していると考えられる。本論では "The Bell Tower" においてメルヴィルが行っている、機械文明批判、帝国主義批判を明らかにしていく。

## ●キーワード

ハーマン・メルヴィル

"The Bell-Tower"

アメリカ合衆国

文明批判

帝国主義批判